

教材 新旧地形図から読む信州・塩尻の近現代

山 口 晋

信州大学経済学部

キーワード：教材，新旧地形図，読図，信州・塩尻

概要 本稿は近代から現代にかけての4枚の新旧地形図を「読む」ことで、信州・塩尻がいかに変容していったのかを示す教材である。塩尻は近世以降の宿場町の面影や機能が近代期になっても残る一方で、近代の工業・農業生産の空間が立ち現れた都市でもある。近代から現代までの塩尻の変遷について、新旧地形図を読むことから理解し、地域を総体的に把握する際のきっかけを提示したい。

序

本稿は新旧地形図を「読む」ことで、地方都市の変容を明らかにしていくということを目的とした教材である。筆者は、これまで長野県塩尻市の地域づくりや農村における「地域ビジネス¹⁾」について調査を進めてきた。その調査結果を、信州大学大学院経済・社会政策科学研究科地域社会イニシアティブ・コースに設置された「地域づくりのラウンドテーブル」などで随時報告してきた。その報告は地図を多用したもので、報告後の参加者からの感想は、「まさに地図を読むことの楽しさを知った」、「地図の読み方をもっと早く知っておけば良かった」など、おおむね好評であった。筆者を含め、大学学部生時代に地理学の教室、学科、専攻などに身を置いた者にとって、新旧地形図の読図は非常に身近なものであるが、学問分野が異なれば新鮮なものの見方となるようである。筆者は地図そのものを対象とした研究はしていない。だが、上記のような感想を得て、たとえ専門外であっても、塩尻の新旧地形図がどのように読めるのかということを提示することは、学部学生や大

学院生が「地域を知る」ためのきっかけを示すことにつながると考える。後述するように、塩尻は近世の宿場町や近代の工業・農業生産の空間が立ち現れた都市である。そういった近世の状況が色濃く残った近代から現代までの塩尻の変遷について新旧地形図から明らかにしていく。その前に、現在の塩尻の概況について簡単に述べる。

長野県塩尻市は、図1にもあるように長野県のほぼ中央に位置し、松本市の南に隣接する。東は塩尻峠を越えて岡谷市に、西は東筑摩郡朝日村に、南は善知鳥峠を越えて辰野町に、北は松本市に接する。さらに、2005(平成17)年4月に木曾郡檜川村が編入合併したことにより、木曾方面は鳥居峠を越えて木曾郡木祖村に接する。降水量は年間平均1,200mmと少なく、寒暖の差が大きい内陸性気候であり、夏は涼しくて爽やかだが、冬は雪が少なく寒さが厳しい。2009(平成21)年における塩尻市の人口は68,328人であり、世帯数は25,616、人口密度は235.5人/km²(総面積290.18km²)である。

塩尻市には、近世の中山道、三州街道、善光

¹⁾松永(2009)によると、地域ビジネスとは「地域ビジネスを活用した産品を生み出すと同時に地域問題を解決し、その過程において雇用や所得が創出され、生活の質を豊かにする仕組み。また、地域内で相互

扶助が強くみられ、地域外との交流を積極的に行いながら、地域の魅力を共有、発信していくための手段」である(241)。



図1 対象地の位置

寺街道（北国西街道）の宿場町である、「奈良井宿」^{にらかわ}、「贅川宿」^{せがわ}、「本山宿」^{ほんざん}、「洗馬宿」^{せんば}、「塩尻宿」^{しおじり}、「郷原宿」^{ごうばら}がある。現在でも、主要幹線道路では国道19号線、20号線、153号線が、鉄道ではJR中央本線、篠ノ井線が通過、分岐し、交通の要衝として発達してきた。また、1964（昭和39）年には、松本・諏訪地区が新産業都市に指定されることで、精密機械製造や一般機械製造といった各種工場の立地が進展した。さらに、農業では、比較的大きな耕地でレタスやキャベツを生産する洗馬地区の岩垂原やぶどうやりんご、なしといった果樹栽培が盛んな宗賀地区の桔梗ヶ原などがある。とりわけ、桔梗ヶ原にはワイナリーが数箇所立地している。こういった塩尻の基本的な特徴を踏まえた上で、以下の章で、近代から現代にかけての塩尻の変遷を新旧地形図から読んでいく。

ここでは、4枚の塩尻の新旧地形図（25,000分の1）を70%に縮小したものを用いて、地域の変遷について示していく。使用する地形図の種類は下記の通りである。①1910（明治43）年測量の地形図（図2）、②1931（昭和6）年修正測量の地形図（図3）、③1975（昭和50）年改測の地形図（図4）、④2001（平成13）年修正測量の地形図（図5）、である。

図2からも分かるように、道路に沿った比較的大きな集落が、図右側の「塩尻村（以下、塩尻村）」と記載されているところに形成されている。図2には記載されていないものの、この集落は「塩尻町」といい、塩尻村の中心である。塩尻村は1889（明治22）年～1927（昭和2）年まで東筑摩郡内の6つの村の1つであり、その村は塩尻町を含む12の大字から構成されていた。塩尻町はかつての中山道の「塩尻宿」と重なる。塩尻宿は江戸から58里、30番目の宿場で、天保年間には人口794人、戸数166戸であった。また、本陣の川上家は建坪367坪で中山道の中で最大規模であったという（地名編纂委員会編1978：642-643）。中山道は図2から容易に確認できる。中山道は図2の左端に位置する「宗賀村」の「平出」を通り（図6）、「しほじり」駅（以下、塩尻駅）のある「大門」の集落を経て、「大小屋」、「堀ノ内」と通って塩尻町に達する（図7）。塩尻町からは急坂を登り、塩尻峠を越えて下諏訪方面へ続いていた。また、中山道以外の街道も塩尻宿から分岐していた。それは「長畝」を経て、松本方面に向かう「五千石街道」と、「金井」を経て、善知鳥峠を越えて、辰野、伊那方面に向かう「三州街道」であった。これらは五街道以外の脇往還として、中馬などによる諸物資の交易路として賑った（図8）。

このように塩尻町あるいは、塩尻村は、主に中世以降の交通、物流の拠点为基础として発展してきた。江戸期から明治期にかけての塩尻町境界の繁栄は、この地に住まう古老の回想録でも触れられている（図9）。

I. 宿場町・塩尻の近代を読む

昔は下宿^{しもじく}と云って南側は大本から下、北側



図6 現在の平出付近の中山道と一里塚
上：右手の塀が昭和電工。写真中央やや左の一本松が平出一里塚。下：平出一里塚。中山道を挟んで、南北両側に一里塚が設置。いずれの写真も2008（平成20）年7月29日に筆者撮影。

は一貫亭から下で、戸数は八十数戸で、徳川時代は両側に商屋、茶屋が軒を並べ、ことに塩尻町に代官所が置かれ信濃全国五万三千石の幕府領を直轄支配した頃は大変な賑わいで、最盛期に飯盛婦が二百三十余も居たと云われています。（塩尻市町区長寿会編 1983：6）

図2にもあるように、塩尻町には「村役場」



図7 堀内家住宅と小野家住宅
上：堀内家住宅。下：小野家住宅。いずれの写真も2009（平成21）年6月20日に筆者撮影。



図8 三州街道への分岐点
中山道から金井、善知鳥峠方面に三州街道が分岐。2009（平成21）年6月20日に筆者撮影。

が設置され、「警察署」や「郵便電信（電話）ヲ兼ル局（以下、郵便電信局）」も立地している。また、旧中山道や旧三州街道から旧五千石

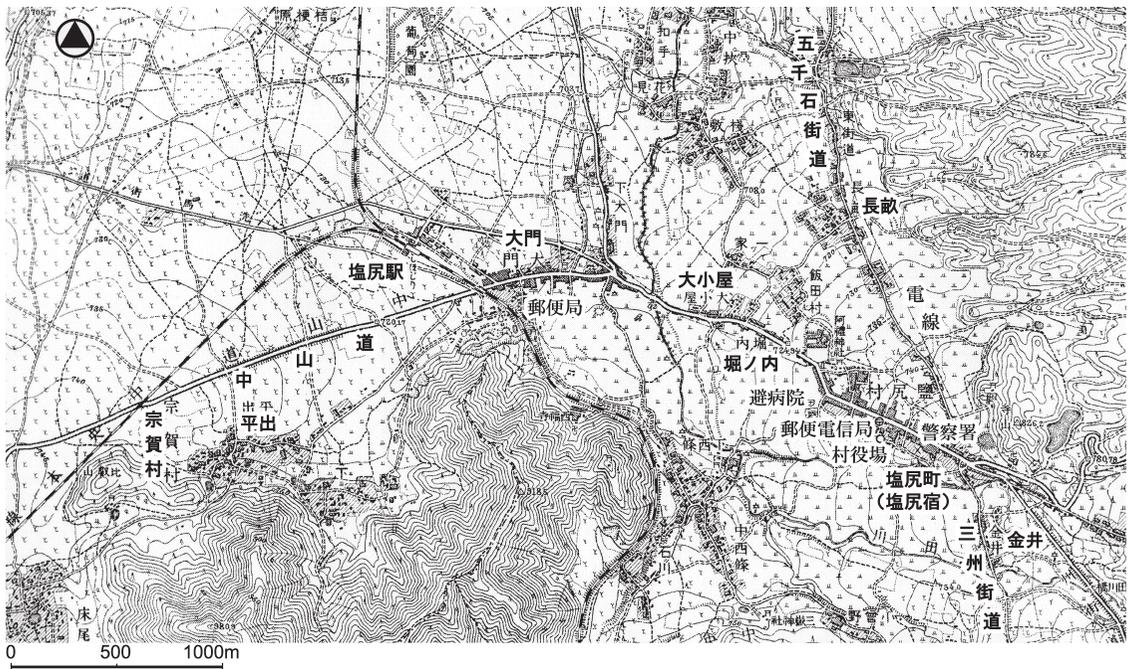


図2 1910(明治43)年測量の地形図

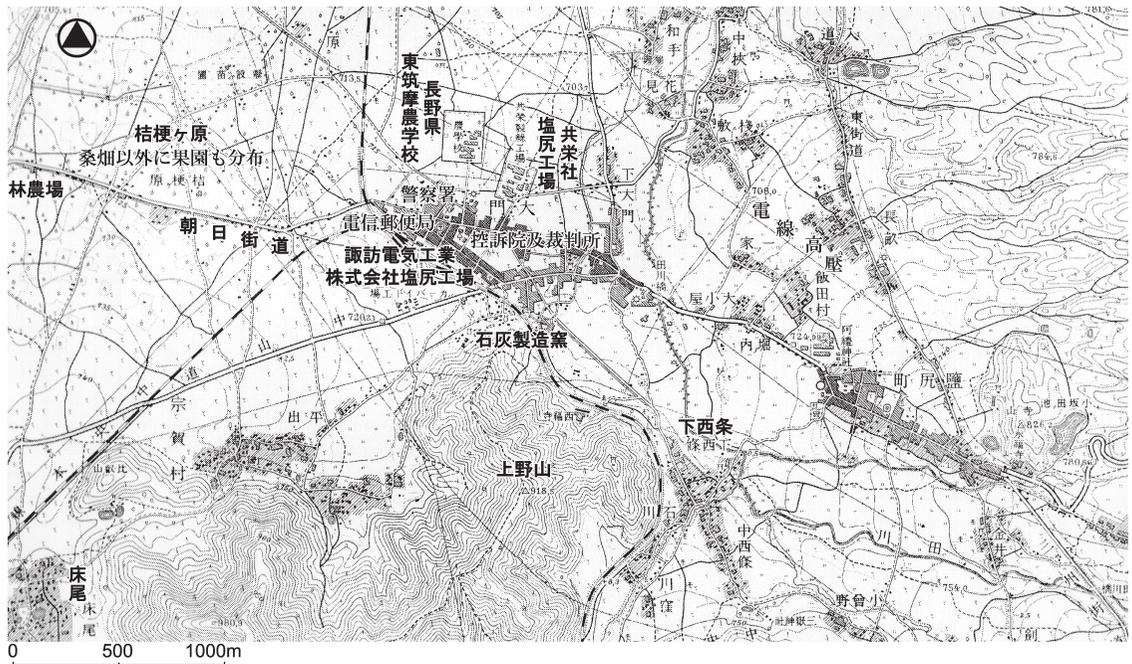


図3 1931(昭和6)年修正測量の地形図



図4 1975 (昭和50) 年改測の地形図

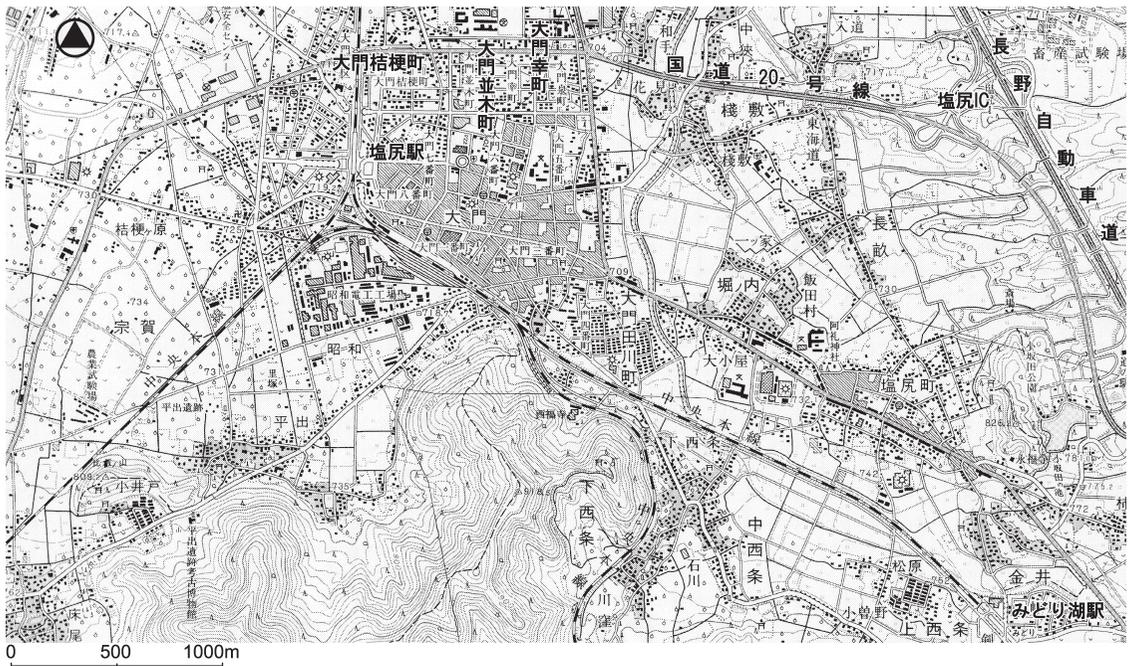


図5 2001 (平成13) 年修正測量の地形図



図9 明治期の塩尻における旅館、商店の情報
中村(1902)より転載。

街道を経て松本方面に続く「電線」が町内にも引き込まれている。塩尻町の西端に位置する「阿禮神社」の西側には「学校」が立地し、さらに、南西端には「板牆」で囲まれた「避病院及隔離病舎(以下、避病院)」がみられる。塩尻村では1898(明治31)年7月に赤痢が発生し、一時猖獗を極めたという(大森・三澤 1974)。こういった伝染病の蔓延を防ぐために、1901(明治34)年8月に塩尻町の南西の外れに避病院が設置されることになる。

ところで、図2の左側をみると、国鉄「篠ノ井線」と「中央本線」の分岐点に塩尻駅が位置している(図10)。篠ノ井から段階的に延伸してきた篠ノ井線は、松本～塩尻間が1902(明治35)年12月に開通し、塩尻駅が開業した。塩尻駅が開業した年に刊行された、中村五一郎著『桔梗ヶ原』には、桔梗ヶ原を南進して塩尻の停車場に到着する汽車の様子が描かれている。

鉄軌原中を横断して、原の南角鹽尻の停車場、時を期し劫を刻し、汽笛の響きかまびすしき。(中村 1902:70)

この『桔梗ヶ原』は、現在の塩尻市全体の地誌ともいえるべきものであり、全12章と附録から構成されている。冒頭の自叙にもあるように、塩尻における「久しく隠れたる歴史的地理的事蹟」を探求している(中村 1902)。さらに、



図10 かつての塩尻駅ホーム
現在の「ヘルスパ塩尻」南側。2008(平成20)年7月29日に筆者撮影。

7つの章で塩尻停車場や塩尻ステーションを場所記述の起点としていることも特徴であろう。塩尻駅開業から4年後の1906(明治39)年に辰野経由の中央東線が開通し、さらに、1911(明治44)年に宮ノ越駅まで延伸して、中央本線は全線開通となった。

だが、図2を見ても明らかのように、塩尻駅の駅前にはわずかな集落しかみられない。近接する大門には、旧中山道に沿って集落が形成されており、「郵便局」(大門郵便受取所)も立地しているものの、塩尻駅周辺は桑畑が卓越しているだけで人家は少ない。

松本方面から建設中の鉄道が完成し、篠ノ井線の終点として塩尻駅(旧駅舎)が開業したのは明治三十五年十二月十五日。木曾嵐に枯れすゝきが吹きなびく中に、藁葺の民家がポツンポツン。背景に今井原から片丘へ続く松林。雄大とも寂寥ともたえ様のない荒野原の真只中であつた。(宗賀公民館桔梗ヶ原分館編 1983:60)

これは後述するように、塩尻駅が位置する桔梗ヶ原は江戸期の入会地であり、明治初期になってようやく小規模開拓が進んだところだからである。また、集落が少ない理由として、桔梗ヶ原は西部を流れる奈良井川の上位段丘面であ

り、水が得にくく、生活用水や農業用水が確保しにくいということもあげられよう。しかしながら、交通や物流が近世の宿駅制から鉄道に移行し、水道などのインフラが整備されるようになると、塩尻町に集中していた行政、商業機能が徐々に塩尻駅周辺に移っていくことになる。

II. 昭和戦前期までの塩尻駅周辺の発展

当時（昭和初頭）の町区は、近在の中心地として賑い、花柳界は華やかで遊郭の九軒の置屋には、芸妓・娼婦・半玉などで夜は、三味線太鼓の音に、料理屋も大小十軒程あって賑やかなものでありました。医院は四軒、呉服屋と百貨店で五軒、銭湯は三軒、理髪店五軒、商人宿が三軒それに製糸工場も四工場もあり、何でも間に合う町でした。しかし、時代と共に次第に商店等は、駅のある大門に移りこの町も昔の面影が薄くなってしまいました。（塩尻市町区長寿会編 1983：40）

図3の右側に「鹽尻町（以下、塩尻町）」という記載があるように、1927（昭和2）年4月に塩尻町が発足した。町役場や郵便電信局はやや移転しているものの、学校、避病院は同じ場所に立地している。また、塩尻峠方面から長畝を経て桔梗ヶ原方面に抜ける「電線 高圧」もみられる。

一方、上述の回想にもあるように、旧塩尻宿である「町区」に集中していた商業施設や生産施設は、徐々に「駅のある大門」に移りつつあった。図3からも明らかのように、塩尻駅周辺には集落が増えつつある。旧塩尻宿方面から移転してきた警察署がみられるし、上大門から移転した郵便局は郵便電信局に機能を拡大している。その他、「控訴院及裁判所」も立地している。また、大門の集落の北には「農学校」と「共栄製絲工場」の2つが立地していることが分かる。この農学校は、「長野県東筑摩農学校」である。これは1910（明治43）年8月に開講を認可された「東筑摩郡立南部乙種学校」がその最初であり、翌1911（明治44）年に開校し、同

年12月に「東筑摩郡立南部農学校」、さらに、1913（大正2）年に「東筑摩郡立農学校」と改称した（塩尻市誌編纂委員会編 1992：825-826）。その後、戦後の新制高等学校として、「長野県東筑摩農業高等学校」となり、さらに1949（昭和24）年に「長野県桔梗ヶ原高等学校」に、1965（昭和40）年に「長野県塩尻高等学校」となり、現在は「長野県塩尻志学館高等学校」となっている。

また、共栄製絲工場は、産業組合製糸である「共栄社」の塩尻工場である。共栄社は1918（大正7）年に設立され、共栄社全体の生糸製造数量と生糸販売数量は32,708貫で長野県全体の約9%を占め、職工数も女子940名、男子111名の県下有数の大規模な産業組合製糸であった（塩尻市誌編纂委員会編 1992：632-635）。このように、塩尻駅周辺には、警察署や郵便電信局以外にも、教育施設や生産施設も立地するようになり、中心性をもつようになってきたのである。

III. 塩尻における生産の歴史—養蚕・ぶどう酒・カーバイド—

(1) 桔梗ヶ原の開拓と栽桑、養蚕

図2をみると、塩尻駅から分岐する篠ノ井線の西側、中央西線の北西側には桑畑が卓越しており、その中に黒抹家屋が点在している。しかしながら、このように桑畑が卓越するのは明治後期になってからである。江戸期は穀作を奨励し、食糧を確保するための「本田畑桑樹栽培禁止令」が定められていたため、明治初期になっても桑樹は田畑の畦畔や河川の氾濫原で栽培されているにすぎなかった（塩尻市誌編纂委員会編 1992：530）。また養蚕は江戸後期から昭和初期にかけて、農村経済を支えてきたものの、大森・三澤（1974）によると、「養蠶は近來に於ける農村生産の最も大なるもので有つたが、之が他の農作よりも、重要な生業となつたのは極めて近年のことで有つて、數十年の昔は只農業の餘暇を利用して蠶を飼育する純粹副業に過ぎなかつた」という（819）。桑の栽培やそれを

原料とする養蚕が本格的に発展するのは明治中期から後期にかけてだったと推察できる。それでは、桑畑が卓越する前の桔梗ヶ原はどのような地域だったのだろうか。

江戸期の桔梗ヶ原は、ススキやチガヤなどが生い茂った原野であり、ここを取り巻く9ヶ村（大門、平出、床尾、郷原、堅石、原新田、吉田、野、高出）の入会地として利用されていた（吉田 1974：30）。当時、桔梗ヶ原は各村に近接した「内野」と桔梗ヶ原の中心部で、各村から遠く、入会地としての「外野」の2つがあり、江戸後期には内野は各村の所有となり、外野も年貢賦課を逃れる「隠田畑」として切添されていた（吉田 1974：62）。だが、明治初期に入ると桔梗ヶ原に住宅を構えつつ、小規模ながらも開拓を進める動きが出てくるようになる。1869（明治2）年に平出村の田中勘次郎が開拓を始めたのが、桔梗ヶ原開拓の最初であるという（吉田 1974：62）。しかし、桔梗ヶ原は奈良井川右岸の河岸段丘の上位段丘面であり、生活用水を確保することが困難であった。生活用水を確保するために井戸を掘削するにしても、地表から30mほど掘り下げなければ出水でできなかったという（吉田 1974：63）。こういった生活環境の厳しさにより、明治20年頃まではさして開拓は進展せず、桔梗ヶ原にはまだまだ原野が多かった。その後、塩尻駅が開業し、交通の便が良くなったこと、井戸の掘削による用水の確保が可能になったことなどによって、徐々に桔梗ヶ原への移住者が増加してきた。

明治四〇年頃には宗賀の地籍にも十七戸ばかりの家が建ち（塩尻地区にはこの頃二十戸余りの家があった）その間には処々原野があった。その大半は諏訪からの移住者で、開墾の目的では養蚕のための桑園を造ることにあった。当時、開墾したばかりのこの地は相当に瘦疲弊していて、何を作っても作物は生育せず、ただ僅かに蕎麦ができるくらいのものであったらしい。（中略）養蚕のために桑の栽植がすすめられて、原野は桑園へと変わって来た。（吉田 1974：96-

97)

明治後期に養蚕が活況を呈し、桑畑も増加した。また、桑樹の「仕立法」の改善や施肥量の増加などにより、桑の生産量も増加した（塩尻市誌編纂委員会編 1992：532）。養蚕について、江戸後期から明治中期にかけて、主にヨーロッパ方面へ蚕種が輸出されていた。だが、1896（明治29）年にヨーロッパで蚕病治療法が確立することにより、蚕種の輸出はほとんどなくなった（塩尻市誌編纂委員会編 1992：519）。すなわち、蚕種生産のための養蚕ではなく、生糸生産のための養蚕にシフトしていったのである。しかしながら、生糸の生産、輸出も政治経済的状況の影響を強く受けることになる。1929（昭和4）年の世界恐慌による糸価暴落や戦時体制に移っていく社会状況の中で、栽桑や養蚕は衰微していくことになった。

(2) ぶどう酒の生産—桑畑からぶどう畑へ—

図2ではほとんどみられなかったものの、図3では桑畑の他に「果園」すなわち、果樹園がみられる。とりわけ、塩尻駅から「桔梗ヶ原」の記載を経て西に延びる道路の周辺に果樹園が立地している。この道路は「朝日街道」と呼ばれ、明治期の桔梗ヶ原開拓もこの街道近くから始まったといわれている（吉田 1974：62）。上述のように養蚕の衰退により、果樹栽培、とりわけ、ぶどう栽培が盛んになっていった。もともと、桔梗ヶ原で最初にぶどう栽培が行われたのは、1890（明治23）年のことであり（塩尻市誌編纂委員会編 1992：520）、その当時は、養蚕業が活況を呈しており、その副業としての果樹栽培があったのであろう。桔梗ヶ原で最初にぶどうを植栽したのは豊島理喜治であり、当時、ぶどう酒の輸出が急増してきたことに目をつけて、醸造用及び生食用のぶどうを栽培した（吉田 1974：90-92）。その後、明治後期に入って桔梗ヶ原に入植した2人の人物によって、ぶどう栽培、ぶどう酒生産は大きな変貌を遂げることになる。まず、小泉八百蔵は1908（明治41）

年に入植し、栽培法の改良とぶどう酒醸造を行った。小泉はそれまで主流だった「ブッシュ」と呼ばれる「垣根造り」から、「棚造り」という栽培法を採用した(吉田 1974: 101-102)。この方法は作業負担や霜害の程度が軽減されるという利点があった。さらに、成熟期のぶどうが台風で落果し、生食用として販売できなかつたために、それを醸造し「酒精含有飲料」として販売した(吉田 1974: 104)。次に、林五一が1911(明治44)年に入植し、桔梗ヶ原の土地を大規模に買収して、大地主となり、本格的にぶどう酒生産を開始した(図11)。その後、大正期から昭和期にかけて、不況と災害のために、桔梗ヶ原でのぶどう栽培は苦難の時代に入ってしまった。出荷額は下落し、諏訪や木曾の商人が入り込んできて、それを相当買い叩くといった状況だった(吉田 1974: 126)。一方、生食用のデラウェア、ナイヤガラも増殖しつつあったものの、コンコードが全体的に多かったことから、それらを消化するために、大規模な施設で醸造する必要があった。このような状況から、林らが大規模な醸造施設を有する企業の誘致活動を展開することとなった。その結果、1936(昭和11)年に「寿屋(現、サントリー)」の「赤玉ブドウ酒工場」が、その2年後の1938(昭和13)年に「大黒(現、メルシャン)」の「ブドウ酒工場」が誘致された(塩尻市誌編集委員会編 1992: 509)。前者の工場は、図4に



図11 現在の林農園

2008(平成20)年6月16日に筆者撮影。

あるように、篠ノ井線の西側に隣接しており、後者は朝日街道が国道19号線と交差した、すぐ西側に立地している(図12)。

(3) 石灰石の産出とカーバイド生産一昭和電工のあゆみから一

ところで、図3の大門の南側の山際に、 Ω



図12 メルシャン勝沼ワイナリー塩尻分場とワイン醸造蔵

上：メルシャン勝沼ワイナリー塩尻分場(現在は閉鎖)の入口と「三葉オーシャン(株)勝沼ワイナリー塩尻分場」の看板。下：ワイン醸造蔵の大樽。いずれの写真も2008(平成20)年10月26日に筆者撮影。

逆さにしたような記号が2つみられ、これは図2にも記載されている。これは「石灰製造窯」を示しており、『昭和電工塩尻工場五十年史』の107ページにある「第22図 塩尻地方の石灰製造窯の分布」からもその位置は確認できる。「上西条」から上野山を経て、床尾に連なる山塊は、石灰石の鉱脈を有し（塩尻工場五十年史編集委員会編 1985：106）、産出された石灰石は近世以来、酸性土壌を中和する肥料として使用されたり（塩尻市誌編纂委員会編 1992：665-669）、カーバイドの主原料として使用されたりした（塩尻工場五十年史編集委員会編 1985：105）。塩尻において、このカーバイドを生産した拠点が、図3の塩尻駅の南西側に位置する「カーバイド工場」であり、図4・5にみられる「昭和電工株式会社塩尻事業所」の前進である。

このカーバイド工場は「諏訪電気工業株式会社塩尻工場（以下、諏訪電気工業）」であり、親会社の「諏訪電器株式会社」からの電力を使用しながら、カーバイドを生産していた（塩尻工場五十年史編集委員会編 1985：7-12）。この当時は、電力事業の生産性が向上していく一方で、養蚕の低迷によって農村経済は疲弊し、電力消費が進まないという問題があった。ゆえに、電力会社は直営会社か子会社を創設して、機械工業や電熱工業などの「電力消費型」の産業をおこすようになった（塩尻市誌編纂委員会編 1992：663）。諏訪電気工業も、上述の上野山な

どに石灰製造窯をもつ「アク屋」とよばれる石灰生産業者から生石灰を購入してカーバイドを生産していた。その後、諏訪電気工業は「日本沃土株式会社（以下、日本沃土）」の参加に入ることになる。この日本沃土は1926（大正15）年の創設であり、諏訪電気工業を含む、いくつかの工場や事業所を買収し、経営を拡大させ、1934（昭和9）年に、長野県大町市にアルミニウム生産工場を建設した。それにともなって、資本金を増額することで、社名も「日本電気工業株式会社（以下、日本電気工業）」と変更することになった。その後、日本電気工業は、1934（昭和9年）に「昭和肥料株式会社」と合併し、1939（昭和14）年には「昭和電工株式会社」となり、「昭和電工株式会社塩尻工場（以下、昭和電工）」が開設された。大正期から昭和期にかけての製品は、カーバイドのみならず、半導体原料である硅素鉄、金属硅素や研削材原料である炭化硅素、そしてモダンラムやフェロモリブデンであった（塩尻工場五十年史編集委員会編 1985：20）。表1からも分かるように、明治期の諏訪電気工業の頃は、工場の用地面積が約200坪（661㎡）しかなかったものの、その面積を拡張して、昭和戦後期には、その50倍の約10,000坪（330,579㎡）を有する大工場となった。それは図4の「昭和電工」の敷地の広さから明らかであろう。図3では工場の周囲にあった桑畑が、図4・5では昭和電工の敷地になっており、中央東線からの引込線もみられる。

ところで、なぜ昭和電工がこの場所に立地し、工場の規模も拡大していったのであろうか。先に触れた『昭和電工塩尻工場五十年史』では、以下のような説明がなされている。

確かに一般に言われているように、当初の原料石灰石の入手が容易であったこと、電力が過剰で使いみちがなく、豊富な上、料金は安価で送電の便が良かったこと、汽車の便がよく貨物流通が良好で、交通の分岐点であったこと、付近に大工場がなく労働力が確保できたこと、用地確保が容易であったことなど、工場発展の重

表1 昭和電工塩尻工場の工場面積の推移

年	面積（単位：坪／㎡）
1907（明治40）	200／661
1925（大正14）	2,600／8,595
1933（昭和8）	50,000／165,289
1937（昭和12）	60,000／198,347
1952（昭和27）	100,000／330,579
1961（昭和36）	80,000／264,463

塩尻工場五十年史編集委員会編（1985：20-21；83）より。

要な因子は整ってはいたが、電炉工業に不可欠な基礎因子である「水」が確保できたことが、何ととっても最大の発展の要因であった。(塩尻工場五十年史編集委員会編 1985: 21)

繰り返すように、昭和電工は桔梗ヶ原の南端に位置することから水が得にくく、大量の工業用水を確保することが非常に難しかった。工業用水を確保するために、奈良井川から導水するか、大規模な掘削によって揚水するかという2つの方法が想定された。ただ、奈良井川からの導水は、水利権の問題と膨大な費用がかかるということから断念され、掘削による揚水にシフトしていった。これは「深井戸」を掘り、伏流水を確保するというもので、失敗を重ねて、1935 (昭和10) 年に地下約85mの地点まで掘ることで用水を確保することができた(塩尻工場五十年史編集委員会編 1985: 21-23)。昭和電工の立地とその発展について、当初は原料が産出する場所で、原料や製品を輸送できる鉄道交通の拠点に近接する立地形態であった。その後、生産を拡充する過程において、自社内を掘削することで大量の工業用水を確保することができた。このような複合的な要因によって、塩尻が「昭和電工のまち」といわれるまでになったのである。

IV. 戦後から現代にかけての塩尻

図4から分かるように、かつての中心だった「塩尻町」と比べて、塩尻駅駅前である「大門」の市街地化が進展している。「市役所」や「電報・電話局」、「警察署」、「消防署」などの公的施設が立地している。また、交通面では「国道19号線」が新たに建設され、桔梗ヶ原を貫通して木曾方面へ続いている。また、篠ノ井線、中央西線が複線化され、塩嶺トンネル経由で岡谷に抜ける中央東線の短絡線が建設中である。篠ノ井線は1961 (昭和36) 年に塩尻～広丘間が複線となった。辰野経由の中央東線は1965 (昭和40) 年に電化された。中央西線の複線電化は1973 (昭和48) 年であり、全国初の振

り子式電車特急の「しなの」が名古屋～長野間を1日6往復した(塩尻市誌編纂委員会編 1992: 435)。中央東線の短絡線ルート案について、塩尻～岡谷と塩尻～下諏訪の二案があったが、最終的に前者が選ばれた。図5からも分かるように、この線は「みどり湖駅」付近は切り通しだが、その他は全て盛土の高架線となっている。短絡線は1983 (昭和58) 年に完成し、従来の辰野経由のルートに比べて、普通列車で34分の時間短縮になった(塩尻市誌編纂委員会編 1992: 437)。図5から分かる大きな変化は、塩尻駅の移転であろう。現在の塩尻駅は1982 (昭和57) 年に開業した。これにより、名古屋～長野間を運行する「しなの」などの列車のスイッチバックが解消された。

街路も計画的に整備されている。市役所の北側は図4では畑が点在していたものの、図5では「大門桔梗町」や「大門並木町」、「大門幸町」などの新たな街区と直交する街路が整備されている。市役所の南側と比べて、建物の密集度は低いものの、まとまった黒抹家屋がみられ、塩尻北部への宅地化を示しているといえよう。同様に、塩尻駅の西側も街路が整備され、図4では少なかった住宅が、図5では大幅に増加していることが分かる。さらに、市街地を迂回するかたちで「国道20号線」が塩尻峠方面に抜けている。これは1988 (昭和63) 年に「長野自動車道」が開通したことに伴い、「塩尻インターチェンジ」への進入路もかねて建設された。

結

これまで、近代から現代までの塩尻のまちの変容について、新旧地形図を読むことによって明らかにしてきた。こういった読図を主題としたテキストは、地理学でも多く刊行されてきたが、近年、とりわけ示唆的なものとして、水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜—地図から読み解く社会と空間—』が挙げられる。その冒頭では、「人文科学や社会科学が好んで分析対象としてきた歴史的、社会的、文化的、経済的な事象を、もっと生々しく、そし

てクリティカルに地図から読み取ること、そして実際のフィールドワークでそうした社会一空間に切り込むための鋭利な視角を示すこと」が、その目論みとして述べられている（水内ほか2008：2）。本書は地図的表象の読解に軸足を置きつつ、時には上空飛行的に京阪神の都市の近代を俯瞰し、時にはミクロに盛り場を遊歩し、生活空間としての路地^{ろじ}を観察する。近代都市史研究にまつわる豊富な知識をもって、地図を読む面白さを喚起させ、実際の都市への地理的想像力を掻き立たせる。京阪神を中心として、ダイナミックに「社会一空間」関係を捉え返しており、まさに、「近代都市史研究に通暁した上で、地図を巧みに配して関西主要都市の出来事や物語を織り込み、その歴史地誌の通史編纂に成功している」（西部2009：245）。他方、本稿はダイナミックに「社会一空間」関係を捉え返すには至っていない。あるいは、地図に記載された空間的事物の布置をクリティカルに読み解いているわけでもない。それでは、本稿が意味するところとはどのようなものであろうか。

冒頭でも述べたように、地図を多用した報告や講義はことのほか好評であった。言い換えれば、身近な地域や生活空間だからこそ、その変容を地図で読むということへの関心が高いのであろう。近年、大学と地域社会との連携が重視されつつある中で、ますます「地域を知る」人材の育成が求められている。新旧地形図などの地図を読むということは、そういった人材を育成する上で格好のトレーニングになるのではなからうか。また、信州には地図として読まれる場所や地域も特徴的なところが多い。塩尻に代表されるようなコンパクトな地方都市は、よりトータルにその変容のプロセスが理解できる。さらに、信州には近世以降の城下町（松本、諏訪高島、高遠、上田、松代、小諸、佐久岩村田など）や宿場町（奈良井、木曾福島、下諏訪、小布施、伊那部など）が多く、景観や物的環境の連続性や断絶性が把握できる。「地域を知る」ためのテキストという意味に加えて、本稿は地域住民が「自らの地域を知る」ための資料とし

ても活用できると考える。というのも、住民の全てが、その地域に精通しているとは必ずしも言い切れないからである。例えば、筆者が調査を行っている塩尻でのまちづくりでは、旧塩尻宿が位置した、現在の塩尻市塩尻東地区において、住民が地区の古老に聞き取りを行って「歴史文化資源マップ」を作成している。この歴史文化資源のマッピングは、「まず、自らの地域を知ること、その地域に関心をもつ」ことを目指している。本稿は、こういったまちづくりに対する基礎的な資料ともなろう。

地域を知るための教材を作成したり、地域づくりに資する資料を提示したりすることは、アカデミアから地域社会に還元する一つのあり方である。もちろん、読図のみならず、他の方法での学知の還元が求められるものの、なにより、地道でもそれを継続することが必要である。さらには、信州における歴史的、文化的、社会的、経済的に意味のある場所や地域に立脚した、より多くの教材が作成されることが今後も求められる。

付 記

本研究には信州大学大学院経済・社会政策科学研究科地域社会イニシアティブ・コースが採択された平成19～平成21年度の「大学院教育改革支援プログラム（研究課題：双方向ワークショップ型地域作り社会人教育）」の研究費の一部を使用した。

参考文献

- 塩尻工場五十年史編集委員会編1985.『昭和電工塩尻工場五十年史』昭和電工株式会社塩尻工場。
 塩尻市誌編纂委員会編1992.『塩尻市誌 第三巻 近代・現代』塩尻市。
 大森利球治・三澤勝衛1974.『鹽尻町誌』明治文獻。
 塩尻市町区長寿会編1983.『塩尻宿』塩尻市町区長寿会。
 塩尻接客業組合連合会編1988.『五十年の歩み』塩尻接客業組合連合会。
 宗賀公民館桔梗ヶ原分館編1983.『桔梗ヶ原』宗賀公民館桔梗ヶ原分館。
 地名編纂委員会編1978.『角川日本地名大辞典20長野』

角川書店。
中村五一郎1902. 『桔梗ヶ原』慶林堂高美書店。
西部均2009. 学界展望 歴史地理 近代. 人文地理61
-3: 244-246.
松永桂子2009. 農商工連携の未来. 関満博・松永桂子
編『農商工連携の地域ブランド戦略』221-243. 新
評論。
水内俊雄・加藤政洋・大城直樹2008. 『モダン都市の

系譜―地図から読み解く社会と空間―』ナカニシヤ
出版。
吉田芳夫1974. 『桔梗ヶ原』塩尻市教育委員会。

(2010年2月4日 脱稿)